

サー・アーサー・コナン・ドイル作：

『バスカヴィル家の犬』

—その作品に観る文学性と社会性—

中 川 智 美

目 次

はじめに

第一章 『バスカヴィル家の犬』—その成立の背景

第一節 モーティマー医師の運んできた事件

第二節 古文書 (Manuscript) の概要

第三節 古文書にみるイギリスの諸伝説

第二章 『バスカヴィル家の犬』の文学性と社会性

第一節 切れたホームズの三本の糸

第二節 バスカヴィル館に向かうワトスン

第三節 「岩上の怪人物」の正体

第三章 作品の終末とひとつの読後感

第一節 世紀末の女性の結婚と作られた魔犬

第二節 作品の読後感—結論：『バスカヴィル家の犬』という作品

おわりに

はじめに

私がシャーロック・ホームズの名を知ったのは、小学生のころに読んだモーリス・ルブラン著『奇巖城』による。この物語の終末ではホームズはルパンの最愛の女性レイモンドを誤って射殺してしまう。幼かった私にはただただ「悪人ホームズ」というイメージだけが植えつけられてしまった。それから十余年、本校に入学したころ、ふとしたことからアーサー・コナン・ドイル [Sir Arthur Conan Doyle (1859—1930)] 著『シャーロック・ホームズの冒険』[*The Adventures of Sherlock Holmes*, (1887)] に触れることがあり、本物のホームズの精神と出会うことができた。彼は誤解を取り払ったうえ、私を夢中にしてしまったのだ。そのため本論文には、ホームズ物語のうち最も人気のある長編小説『バスカヴィル家の犬』(*The Hound of the Baskervilles*) を取り上げてホームズの活躍したイギリス、ヴィクトリア朝の社会や作品の文学性について展開してゆく。

なお、本稿の論考の基礎文献としては、ヘンリー・T・フォルサム氏が発表された『ベーカー街年代学』(*Through The Years At Baker Street*)によるところが大である。事件名は《 》、書名は『 』、英書名は“ ”で論文中に表すものとする。

第一章 『パスカヴィル家の犬』—作品成立の背景—

第一節 モーティマー医師の運んで来た事件

ホームズとワトソンの暮らすベーカー街に事件を運んできた主は二人の留守中に訪れ、ステッキを残していた。そのステッキは細身な作りで、球形の握りの下に幅1センチくらい銀の帯がまきつけてあり、そこに“王立外科医学協会準会員ジェームズ・モーティマー君へ。CCHの友人より1884”とあった。

「どうだね、ワトソン君、それをどう思うね？」(『パスカヴィル家の犬』延原謙訳)
ステッキを手にしたワトソンの姿が見えるかのようにホームズは尋ねる。

「僕のしていることがどうして分かるのだろうか？背中に眼がついているみたいだね」
「鼻のさきに磨きのかかった銀のコーヒー壺があらあね。そんなことはまあどうでもいいが、君はそのステッキを見てどう思うね？」(以下略。延原謙訳)

作品の始まりの部分からの抜粋である。この作品が連載されたのは『ストランド・マガジン』の1901年8月号からである。じつはそれより8年前、1893年、同書12月号に掲載された《最後の事件》でシャーロック・ホームズはスイスのライヘンバッハの滝に、最も危険な犯罪王ジェームズ・モリアーティと共に落ちてしまっていたのである。

1893年から1901年までの8年の間、ドイルは病床に伏す妻の療養の手助けや勃発したボーア戦争に野戦病院の事務長として参加したりした。妻ルイズの看病に疲れたドイルは友人フレッチャー・ロビンソンと共にノーフォーク州の温泉場に滞在した。その際ロビンソンの故郷ダートムアーに伝わる犬伝説について聞いた。興味を持ったドイルは現地調査に行き、作品化されたのが、本論文の主題となった『パスカヴィル家の犬』である。この作品が発表されるまでは、中世歴史物語が主だったので、徐々に登場したホームズが友人であるワトソン博士にステッキを推理させるセリフは、ホームズの登場を待ちに待っていた読者には嬉しくてしかたのないものだったろう。

ワトソンは、モーティマー医師は狩猟会(Hunting)の会員に治療上、特別な好意を与えたか何かでステッキを贈られた評判の良い年配の医者だと推理した。

ホームズは推理したワトソンに「君は習慣的に君自身の才能をみくびりすぎてきた傾きがあるよ」と、一応の謝辞を述べてから自分の意見を述べる。

- ① CCHはチャリング・クロス病院(Charing Cross Hospital)を意味する。
- ② 病院を辞める時、友人達から贈られたステッキだ。
- ③ 病院の幹部ではなかったので、田舎に開業した。
- ④ まだ三十才にもならない人好きのする、青年の野心なんか失ったうっかりもの。
- ⑤ 犬を飼っている。テリアより大きくマスティフよりは小さい。

ステッキー本からホームズは以上五点を推理した。その推理中、化学畑の人ジェームズモートィマー医師が、犯罪学の専門家シャーロック・ホームズを訪ねて来た。そしてモートィマー医師はバスカヴィル家に伝わる一枚の古文書 (Manuscript) を取り出し、それがチャーズ卿の怪死をひきおこし、アメリカから爵位を継ぐために戻って来るヘンリー卿にも危険を与えるのではないかと、ホームズに相談する。

医学という化学の分野に携わる彼が、余りにも迷信めいたことを言うと思議に思わざるをえないのだが、理由がいくつかある。

① チャールズ卿の死について

- (1) 卿は次期選挙に立候補を予定していた。
- (2) 翌日からロンドンに旅行をする予定だった。
- (3) 心臓疲弊・呼吸困難が死因だった。そんな老人が沼沢地の入口まで散歩した。
- (4) チャールズ卿の遺体から少し離れたところに巨大な犬の足跡があった。

チャールズ卿の側に死ぬような理由はない。ということは他殺と考えられる。

② ヘンリー卿について……この内容についてはホームズとワトソンは後に知る。

- (1) 買ったばかりの新しい赤靴を片方なくす。
- (2) 脅迫状を受ける。
- (3) なくなった赤靴が出てきて、古い黒靴が片方なくなる。
- (4) 尾行される。

以上の点からホームズは何者かが犬を利用してアメリカ跡継ぎとして戻ってきたヘンリー卿を危険に陥れようとしていると考えた。

第二節 古文書 (Manuscript) の概要

モートィマー医師がホームズとワトソンに読んで聞かせた古文書の概要を、此の第二節に掲載してみたい。

頃ほかの大反乱時代 (Great Rebellion 17世紀中葉) と知るべし。当バスカヴィル領は同姓ヒューゴウ (Hugo Baskerville) なる者の領有なりしが、その人となり甚だ気性荒く瀆神不敬なりしこと、否み難きのみならず性淫蕩にして暴虐のふるまい多かりし故に西部一帯にその悪名は高かりき。

おりしも彼は自領にほど近き郷土の娘に懸想せるが、かの娘いと貞淑にしてヒューゴウの悪名をいとい、応ずる気色なかりしに、ひととせの聖ミカエル祭 (Michaelmas) の日、ヒューゴウは保護者の不在をうかがい、無頼の徒数人と語らいて娘を奪いされり。

かくて彼らはヒューゴウが館に娘を運びて階上の一室に閉じこめ置き、階下につどいて例夜の如く酒宴をはる。あわれなる娘は生きな空なく、ついに恐怖にたえかね、大の男もためらうべきに館の南西の壁に今なおしげる藁をつたいて外に逃れ3リーグ (9マイル) の湿原をただひとり、慈父がもとへ走り行きけり。

やがてヒューゴウは娘を手なづけんと階を上がりしに、すでもぬけのからなりけりれば悪鬼の如くたけり狂いて階段をかけくだり今夜がうちにも娘を取り戻さずば、わが身も

心も悪魔に捧ぐべしと一同にわめき散らしたり。(Hugo left his guests, to carry food and drink —with over worse things, perchance— to his captive, and so found the cage empty and the bird escaped.)

酔いしれたるというべき者の、犬もて追わしめよと叫びければ、ヒューゴウは、馬に鞍おけ、犬舎の戸をあけ放て、と、おらびつつ悪鬼の形想ものすごく庭におどり出で、娘の残せしハンカチを犬どもに嗅がしめ、自らは悍馬にむちうって、月影冴ゆる湿原さして飛ぶが如くに走り行く。

一同騒然となりて身支度をととのえ、総勢十三騎くつわをならべて後を追う。

一・二マイルも行くほどに、湿原地に夜をすごす牧人に行き会いければ、もしや追い行く者たちを見ずやと呼びかくるに、かの者怖しさにとみには得答えざりしが、やがて申しけるには、あわれなる娘とその後を追う獵犬の一群を見たり。されど我が見しはそれのみならず、ヒューゴウ・バスカヴィル殿みずから青毛の駒にうちまたがりて駆け過ぎるあとよりは、神も放つを禁じ給うべき地獄の犬 (a hound of hell as God forbid) の声もなく追い行くを見たりと。

酔いどれ郷紳たちは牧人のたわごととののしり散らしつつ、なおも駒を進めけるが、ほどなく、あわただしき蹄の音の湿原を渡り来るや、白き泡を嘔みて鞍に主なき青毛の馬の手綱引きずりながら逃れて行くのを目のあたりにし、一同慄然として冷水をあびたる如く、もしただ一人なりせば、馬首をめぐらし、とく逃げ去りたるは必定なれど、衆をたのみ一団となりて恐るおそる進みゆくほどに、ようて世にしられし品種なるにも似あわず、湿原にそなわる窪地のはしにむらがりて悲しげに鼻をならし、あるは尻ごみし、あるは毛逆立て眼をいからせて目前のせまき谷間をうかがう有様、ただこととも見えざりき。

なかにすぐれて酔いしれし者どもが、意を決して窪地へ駒を乗り入れけるに、窪地の底の開けたる中にそばだつ兩個の巨石あり。(It opened into a broad space in which stood two of those great stones, still to be seen there.) 遠きいにしえ、誰ともしられざる人々の、設けしままになおここにありという、そのただなかに、今は怖れとつかれてあわれ魂空しくなりしかの乙女の月明かりにふしたるを見る。

されど三騎の猛者をおののかしめたるはその娘のなきがらにはあらず、ともに倒れたるヒューゴウ・バスカヴィルがむくろにもあらず、そはただ一頭のいとも大いなる獣の、犬の形したれど、いかなる犬にも増して巨大かつ瘳猛なる真黒き獣の、まさにヒューゴウがしかばねにのしかかりて、彼ののどもと深く食い入りたる世にも恐ろしき光景なり。しかも怪物はヒューゴウののどぶえを食いちぎるよや顎より血潮したたらせつつ、燃ゆるが如き眼光するどく彼らをにらみかえしければ、さしもの荒くれ三名も肝を消し、悲鳴をあげつつ命からがら湿原を逃れかえるも、一人はその夜を去らで落命し、残る二人も魂ぬけたる如く、呆然と余生を過ごすのみなりしとぞ。

子らよ。この物語こそがバスカヴィル家累代の怖るべき呪いとなれる犬の由来なり。わが家系の者多く奇怪な死をとげしは否み難きところなれど (Nor can it be denied that many of the family have been unhappy in their deaths.) 罪なき者にはいつか神の加護あるべし。子らよ。ひとえに神を頼れ。かまえて悪魔の跳染する暗き夜に湿

原を過ぐることなかれ。

『バスカヴィル家の犬』延原 謙訳。英文は YOHAN PEARL LIBRARY “THE HOUND OF THE BASKERVILLES” によるものである。

第三節 古文書にみるイギリスの諸伝説

この『バスカヴィル家の犬』にある古文書で注目する点は二点ある。

まず、娘を追うヒューゴウ・バスカヴィルの姿とグイン・アプ・ニーズの姿である。グイン・アプ・ニーズ “Gwyn ap Nudd” はイギリスでは古くから有名な幽霊猟人で、真っ黒な馬にまたがり、魔犬を従えている。その犬はクワン・アンヌンすなわち他界の犬であり、他界からやってきて人の魂を空中に狩る。風の強い晩にその犬たちの鳴き声を聞き、またはその姿を見るのは死の予兆だといわれている。グイン・アプ・ニーズのその名はアーサー王物語では最も古い『アビノギオン』の中の『キルファフとオルウェン』に出てきている。冥府の王とされ、ケルトのプルートのモデルであるとも言われる。

バスカヴィル家の古文書にある<黒馬にまたがり、猟犬どもを駆ってあわれなる乙女を追ったヒューゴウ・バスカヴィル>は暴虐な領主の呪われた姿としての幽霊猟人と魔の犬を連想させる。

そしてもう一点の注目する点は乙女のふしたる『窪地の底の開けた中にそばだつ兩個の巨石』である。古代、ケルト族のドルイド僧達は環状列石の前で神秘的な儀式を行ったとされる。以降、一般にこうした古代の祭祀遺跡では、この世ならざるものに接することがあるという俗信が広まった。古文書にも娘は巨石の中に倒れていたことになっており、そこに地獄の犬が現われている。娘の古代の神への祈りが地獄の神へ届き、『地獄の犬』を出現させたかのように読者に思わせるようにできている。

故チャールズ卿は近代化の進むイギリスの、爵位ある男性である。その上南アメリカで大成功を収めた企業主でもある。そんな彼が科学的根拠のない迷信を信じたというのは妙である。

だが、現代の我々でも“流し雛”として災いを背負ってくれる人形を川に流したり“償物”として正月に、人間の罪や穢れを背負う注連縄や松飾を、済めば焼き捨てる。それはただの一般行事に溶けこんでしまっ^{あが}てはいるが、日本古来の陰陽道の思想を背負ったものである。

イギリスの地方の地主・領主の古屋敷とその伝統のある家系には大なり小なり奇怪な伝説がつきまとっている。イングランド南部ではデヴォン州だけでなく、バッキンガム州・ハーフォード州・ノーファク州・ランカ州・ドーセット州・コーンウォール州などにも怪犬・魔犬の伝承が多くあり、それが夜特有の地域に出現するという恐ろしい黒犬であったことは、1864年に出たチェイムバーズ編集の『日次歳時記』第二巻に紹介されている。

ドイルの『バスカヴィル家の犬』以前でもダートムアでは幽霊猟犬は有名な存在だった。

デヴォン州とは海峡を隔てた対岸のウェイルズの男がコットムアという野原で地獄の犬

と遭遇したという話が1780年にかかれた書物に出ているが、その怪異と出あった場所というのが、ヒューゴウ・バスカヴィルが地獄の犬に殺された所とそっくりであった。そこには少し間をおいて立てられた二つの石があって、悪魔の馬^{うまづ}連れと呼ばれ、悪霊どもがたたって通交人をなやます場所だと言われていた。

中村希明著の『怪談の化学』によると、怪物・怪犬が出没するのは、生理的幻覚・境界領域における幻覚などによるものであるとされる。

この古文書やそれから連想される伝説に共通している『兩個の巨石』は、後者である境界領域における幻覚であると思われる。

第二章 『バスカヴィル家の犬』の文学性と社会性

第一節 切れたホームズの三本の糸

モーティマー医師の要請を請け、二人はヘンリー卿のいるホテルを訪れる。そこでヘンリー卿に届けられた脅迫状を見る。

生命を惜しむ理知あらば、かまえて沼沢地に近付くなかれ

As you value life or your reason keep away from the moor.

文面は新聞を切り抜き、一文字ずつはりつけてあった。ホームズはそのことに興味を持ち、拡大鏡で見、ややもすれば見過ごしてしまいそうな以下の点を指摘する。

- ① 新聞はタイムズ誌の論説欄の自由貿易に関する論説
- ② 爪きり鋏を使って切っている。ノリはゴムノリ。
- ③ 不注意からか、心の動揺からか、急いだのか、“life”が酷く横へずれている。
- ④ タイムズの置いてあるホテル（有名ホテル）で書かれた。
→インク壺にインクがほとんどなく、ペンはよく引掛かる。
- ⑤ 封筒の宛名書きは筆跡を誤魔化すために下手な字を装っている。
- ⑥ 消印はチャリング・クロス局

「発見したよ！とうとう発見したよ」彼は一本のピペットを手に、走り出てきながら、スタンフォードにむかって叫んだ。

「血色素にあえば沈殿するけれど、血色素以外のものでは絶対に沈殿しない試剤を発見したよ」

《緋色の研究》でワトソンとホームズが初めて出逢った部分からの抜粋である。このあと『たとえ金鉱を発見したって、これほどうれしそうな顔はできないからう』とある。

このようにホームズは拡大鏡をつかっただけの指紋・足跡の有無調査や血痕鑑定に興味を持ち、それを捜査の場面に使用していた。これらホームズの鋭い観察力や洞察力は、筆者ドイルの恩師であるベル教授がモデルであると言われている。

ベル教授は、次のように表現している。

細身のしなやかな体つきで、わし鼻がとがり、鋭い灰色の目が人をさすようであった。声はかん高く、ちょっと足をひきずる歩き方をした。熟達した外科医であった

が、その講義では医者として患者の見立て、それも病状だけでなく職業も性格も見抜くべきだと主張していた。(河村幹夫著『コナン・ドイル』より抜粋。)

一方ホームズは、といえば≪緋色の研究≫に次のようにある。

身長もたっぷり六フィート以上あるが、ひどく肉がないので実際よりはよほど高く見える。眼といえば(中略)射るような鋭い光をもっているし、肉のうすい、鷲のような鼻は全体の風貌に俊敏果敢な印象を与えている。そして彼の顎、これがまたぐっと出て角ばり、決断の人であることを示している。(延原謙訳『緋色の研究』より抜粋)

脅迫状にも負けず、領地ダートムアー入りをしようとするヘンリー卿を尾行する者があった。御者は男を覚えていた。男は四十才くらいで黒いあごひげを四角に刈りこんでいた。ホームズは御者に問う。

「彼はほかに何か言ってなかったかな」

「彼は名をいきましたっけ」

ホームズはちらりと私のほうに眼をはせて、それ見ろという顔をした。

「ふむ、名まえを言ったんだね？そいつは軽率だったな。何という名だったね」

「その名はね、シャーロック・ホームズっていうんでさあ」

御者のこの答えを聞いたときほど、ホームズの狼狽したのを見たことがない。

“Did he say anything more?”

“He mentioned his name.”

Holmes cast a swift glance of triumphant me.

“Oh, he mentioned his name, did he?”

That was imprudent. What was the name that he mentioned?”

“His name,” said the cabman, “Was Sherlock Holmes.”

Never have I seen my friend more completely taken abeck than by the cabman's reply.

犯人はホームズが後で自分を捜すであろうことを確定していて、御者にわざとシャーロック・ホームズと名乗るのである。悪賢い犯人を相手に、ホームズは三本の糸を張る。

一本目は脅迫状がタイムズを切り抜いていたことからカートライト少年をチャリング・クロス界隈の二十三軒のホテルをまわらせ、屑かごから新聞を捜し出させることだったが失敗に終わった。

二本目はさきにも書いたように尾行者の乗っていた馬連の御者を捜し出すことだった。

三本目は尾行者がバスカヴィル館の執事バリモアに似ていたことから、彼が犯人であれば館にいないであろうから、彼宛に電報を打ったのだが「バリモアハ館ニアル由」と返事が来た。

こうして三本の糸は途切れてしまった。

第二節 バスカヴィル館に向かうワトスン

材料だ、材料だ、材料だよ！ 粘土がなくて煉瓦がつくれるもんか！

"Data! data! data!" he cried impatiently. "I can't make bricks without clay."

《バスカヴィルの犬》事件よりさかのぼること10年、1890年にホームズの携った《ぶな屋敷》事件で彼自身が吐きずてるように言った言葉である。

資料を集めるため、ダートムアールのバスカヴィル館に入るヘンリー卿と共にワトスンを送った。その間、ホームズは他の仕事を片付けるためにロンドンに残るのである。

ホームズはワトスンにいくつかの注文をした。その一つは「できるだけ詳しく事実の報告だけをよこしてくれたまえ。意見なんか加えないでね」ということであった。その手紙でホームズは《バスカヴィル家の犬》事件を推理するというのだ。そうして「常にヘンリー卿のそばで彼を護衛すること」、「暗き夜に沼沢地をすぐるなかれ」とも忠告した。

そうして列車はヘンリー卿・ワトスン博士・モーティマー医師を乗せて一路デヴォン州へ向かって走るのであった。

ワトスは窓をすぎるとどかな田園風景を見る。

それより10年前、パイオレット・ハンター嬢の運んできた事件（《ぶな屋敷》事件）で、ウィンチェスターに向かう列車の中でホームズは、美しい田園風景を眺め賛美するワトスンに言っている。

僕は家々が孤立していることのほうが気になるね（中略）人知れず犯罪が行われていてもわからない。これがロンドンの街ならばどんないかがわしい裏通りでも人目はあがる。警察の組織だって整備されているだろう。どんな愚かな者でも、見る目がなくても、それは抑止が足り得るのだよ。しかるに見たまえ。この“どかな景色”この中でどれほど恐ろしい犯罪が未発見に終わっていることか——。（阿部知二訳）

You look at these scattered houses, and you are impressed by their beauty. I look at them, and the only thought with crime may be committed there. (中略) It is my belief, Watson, founded upon my experience, that the lowest and vilest alleys in London do not present a more dreadful record of sin that does the smiling beautiful county-side.

村に着き館に向かう一行に、セルデンという殺人犯が監獄から逃げたということが教えられた。

ちなみに、ダートムアール刑務所の歴史は古く十八世紀の後期ナポレオン戦争におけるフランス人捕虜を収容するために建設されたのが元となる。収容された捕虜たちの生活は、衛生その他の面も劣悪で、1809年から7年間に1478人もの死亡者を出したという。その後、捕虜たちも本国送還され、1850年には150人もの囚人と共に刑務所としてスタートしたものである。（『詳説シャーロック・ホームズ』より）

そして館に着たヘンリー卿は執事バリモアに「次の使用人が見つかり次第暇を取りたい」と申し出られる。

実はバリモア夫人は脱走したアルデンの姉で、脱走した殺人犯は姉を頼って沼沢地まで来て潜んでいた。そのセルデンのため、バリモアが食料を運ぶのである。食料を運ぶのが皆が寝静まった夜更けであったり、殺人を犯した弟を思うバリモア夫人の啜り泣きの声など、ヘンリー卿をつけ狙う尾行者に風貌の似た執事バリモアに読者の目がゆくように物語はすすんでゆく。

そしてセルデンを捕まえようとワトソンとヘンリー卿は、ホームズの忠告を破って夜の沼沢地に入って行き、そこでセルデン以外に沼沢地に潜んでいる「岩上の怪人物」を見る。

第三節 「岩上の怪人物」の正体

ワトソンはバリモアから「隠していたが、チャールズ卿が亡った夜、彼はある女性と逢う予定だった」と聞かされ、ローラ・ライオンズを割り出す。彼女はフランクランドという裁判狂の老人の娘で、ライオンズというならず者の画家と結婚してしまい、故チャールズ卿が生活の面倒を見ていた女性だった。ローラはワトソンに「ちょうどその時、他に援助してくださる人が現れたから」と、その場にはいなかったことを告げた。

また、ひょんなことから「岩上の怪人物」の居場所が明らかになった。

彼女の父親フランクランド老は、それを殺人犯セルデンの住居だと思い、ワトソンに自慢として打ち明けたのだが、彼はそうでないことを知っていた。

ワトソンは「岩上の怪人物」の住居に入ってギョッとする。『ワトソン先生はクーム・トレシー（ローラ・ライオンズの住んでいる街）へ出張中なり』という紙片があったのだ。ワトソンはどうしても「岩上の怪人物」を捕まえようと○室で待ちかまえていた。すると、外から「落ち着いた歯ぎれの良い、やや皮肉にも思われるあの声」がしたのである。

ワトソン君、夕やけが美しいね。（中略）そのな暗いところにはいないで出てきたまえ。外の方がずっと晴々するよ。

“It is a lovely evening, my dear Watson”（中略）“Come out” said he, “and please be careful...”

ホームズは外に落ちていた煙草の吸殻がロンドンのオクスフォード街のブラッドリ商会の商標が付いていたこと、ワトソンならば獲物をそばに主人公の帰るのを待って、待ち伏せしているであろうと考えたのである。

一方、ワトソンは厭味の一つでも言いたくなっていた。ロンドンにいるホームズのために懸命に手紙を書いていたというのに、本人はすぐそこで生活していたのだ。

なんだか君の身辺がだんだん危険になって来るよう思われたからね（中略）その上僕がもしヘンリー卿や君のそばにいたとすれば敵は大いに警戒を始めるからね（中略）だから僕はほかの仕事で忙しいからロンドンに居残っていると見せかけて…（中略）ワトソン君、きみの報告はみんなここにあるよ。くり返し読んだから、ずいぶん手垢でよごれている（中略）君の熱意と手腕には、僕としてはただ舌をまいて驚きかつ感

謝するほかないよ。

そうしてホームズはままとワトソンと読者を欺き、調査したことを得意満面にワトソンに述べるのである。

そうする間に陽は傾き、沼沢地に恐るべき叫び声が鋭く響き渡ったのである。ホームズは脱兎の勢いで闇の中を駆けた。ワトソンも遅れじとつづく。しかし、時すでに遅く、二人の耳に断末魔のうめきと共に、ドカリと鈍く重い音が届いた。

ホームズは精神の錯乱した人のように、額に手をあてていたが、こんどは口惜しそうにじだんだをふんで言った。

「ワトソン君、やられたよ。遅かったんだ」

「いや、そんなことはない。そんなはずはない」

「手を控えて大事をとりすぎて、ばかなことをした。ワトソン君、きみが任務を忠実に守らなかった報いだけ！しかしてきたことは仕方ない。こうなったら復讐だ！」

I saw Holmes put his hand to his forehead like a man distracted. He stamped his feet upon the ground.

"He has beaten us, Watson. We are too late."

"No, no, surely not."

"Fool that I was to hold my hand. And you, Watson, see what comes of abandoning your charge! But, by Heaven, if the worst has happened we'll avenge him"

しかし死んだのはヘンリー卿ではなく、彼の古着をもらった殺人犯セルデンであった。ヘンリー卿が狙われているのは絶対で、犯人はステーブルトンであるとホームズの捜査で分かっていて、セルデンがバスカヴィル家の魔犬に殺された以上、次に狙われるのはヘンリー卿である。ホームズとワトソンはロンドンに戻ることを卿に告げ、卿を一人でステーブルトンの晩餐に出席させた。事は一刻を争う。

第三章 作品の終末とひとつの読後感

第一節 世紀末の女性の結婚と作られた魔犬

ホームズはワトソンを伴ってローラ・ライオンズの元へ行く。実はベリル・ステーブルトンはジャック・ステーブルトンの妹ではなく妻なのだと彼女に告げる。

ヴィクトリア朝では家父長制度がなお家庭形成の基本とされていた。そのため、女性の男性への従属は当然で社会的・政治的権利はほぼ認められていなかった。また、離婚も女性のがわからずは手続きも複雑で、時間・費用が多分に必要とされ、ほぼ離婚は不可能だった。そのため不幸な結婚に苦しむ女性が多かった。

ローラ・ライオンズもそんな女性の一人だった。そんな彼女にステーブルトンは独身として、また現在の夫と離婚手続きを済ませた上で結婚を申し込んだ。そうして彼女にチャールズ卿を呼び出させ、その晚いかせなかったのである。

ヘンリー卿は一人で、ステープルトン家の晩餐に出席した。そして卿はホームズの言うとおりで沼沢地を横切って帰るのである。そこに彼の狙いどおりにバスカヴィルの魔犬が出現するのだった。

「リンだ！（中壑）上手に犬の嗅覚を害さないようにしてある」

犯人ステープルトンは犬にリンを塗って伝説のバスカヴィルの魔犬を作り上げたのだと文面にあるのだが、リンは劇薬中の劇薬である。空気中の酸素と結びつく力が強く、青白く光るのはリンの中でも「黄リン(白リンとも)」と呼ばれるもので、湿った空気中では徐々に酸化され、暗所では青白色の微光を放つため、水中などで空気を遮断して蓄えられる。

リンが劇薬だと呼ばれるのは、それが皮膚に触れると酷く重い火傷をおこすことによる。リンによって火傷をおった場合、患部を硝酸銀溶液で濡らし、残っているリンを酸化させる。その後、水で洗い通常の処置をとる。その処置が遅れるとリンパ管に炎症を起こし、中毒症となる。また、リンを吸入した場合、瞳孔拡大・網膜出血・血管鬱血及び視神経炎を起こす。慢性的曝露は、貧血・消化器系への作用・自然骨折につながる長骨の脆弱化・顎の壊死を引きおこす。

文章中からバスカヴィル家の魔犬の出現を思わせる部分を抜粋してみる。

なんとも言いようのない悲しげな呻き声が、どこからともなく聞こえてきたからであるものか分からなかった。それもはじめは、かすかな呻き声であったのが、次第に底力のある咆哮にかわってゆき、しばらくするとまたすすり泣くように沈んだ調子にかすれていった。（第七章、博物学者ステープルトン：The Stapletons of Merritt House）

夜の沈黙をやぶってどことも知れず、風のまにまに長くふかい溜め息のように聞こえるかとおもうと……（中留）「世間ではあれをバスカヴィル家の魔の犬の遠吠えだといっています。（第九章、暗夜の怪光：Second Report of Dr. Watson）

彼ら百姓はたんに怪しい犬の姿を認めただけでは満足せずに、その眼と口からおそろしい火をはいていたとかならず言う。（第十章、怪しい女の名は：Extract from the Diary of Dr. Watson）

このときおそるべき叫び声——恐怖と苦痛のながい絶叫が、沼沢地の夜の沈黙をやぶって、するどくひびきわたったのである。ウォーツというような、海の怒濤をおもわず気味の悪い音もまじっている。「犬だ」ホームズが叫んだ。（第十二章、沼沢地に死ぬ：Death on the Moor）

このうち、姿を見られたのは二件だが、第十章のばあい、魔犬を見掛けた回数を提示していない。一度に一人とは限定できないが、幾人かの村人が、幾度か魔犬を見掛けている。以上のことを考慮しても、作られた「バスカヴィル家の魔犬」はリンを常用しており、貧血、骨の脆弱化を起こしているはずである。よって第十四章における「バスカヴィルの魔犬」のヘンリー卿襲撃はありえないのである。

第二節 作品の読後感—結論：『バスカヴィル家の犬』という作品

物語は「犯人ステープルトンは沼沢地の底なし沼に落ちて死んでしまったのだろう」という曖昧なことで終わっている。これは他のホームズ物語にも共通していることなのだ、犯人の結末までは記されていない。

ドイルの作品は、いわゆる「英国文学」としては扱われず、「英国大衆文学」であると言われる。しかし、ドリアン・グレイ(註)を知らない者はたくさんいても、シャーロック・ホームズを知らない者は世界中には数えるほどしかいない。本作品のリンにしてもジメジメしたダートムーアという土地によく合っている。しかし、リンのトリックにしてもこの作品は医学者ドイルの医学推理作品とは言い難い。これは正に「大衆文学」である。また「大衆文学」だからこそ言えることがあるのではないだろうか。

十九世紀のイギリスは、経済・科学の面において大いに進歩した。にもかかわらず、人々は科学的根拠のない怪談や迷信に心を捉えられていたままだったのではないだろうか。

事件から約100年たち、経済・技術の中心は極東の方へ動きはしたものの、そこに生きる人々の心は相変わらず、時代の激しい変化についてゆけないのではないだろうか。

ドイルは「大衆文学」であるこの作品で、様々な人々に、人々の見過ごしがちな日常の中にこそ危険は潜んでいるのだ。そしてそれを科学(化学)的、かつ論理的に分析し、対応してゆくことが必要なのだということを、ホームズを通じて述べているのではないか。

私はここで広島県出身の被爆二世でシンガーソングライターをしている浜田省吾を紹介したい。なんて突拍子な…と思うかもしれないが、私は二人のS・Hの一人として彼を紹介したい。

浜田省吾はブラウン管ののって出て来る歌手ではない。デビューした時から脚光をあびていたわけではなく、何年も陽の目もあたらず、売れなかった彼は殊にテレビ出演をせずコンサート活動だけをしている。彼を語るエピソードの一つにこんなものがある。

デビュー当時、省吾は雑誌のインタビューに答えていた。ぞんざいな記者の扱いに、彼はギターケースに貼ってあった「こわれもの」というステッカーを胸に貼り俯いてだまりこくってしまった。(『陽のあたる場所』より)

そんな戦後生まれのシャイな青年の書いた歌詞一詞(ことば)一である。彼の歌詞一詞(うた)一には読む(聴く)者を引きこむ何かがあると思う。大衆文学を論ずるにふさわしく、大衆音楽から選んでみたとき、そこに戦後からの日本の姿があると思ひ掲載してみた。

RISING SUN 一風の勲章—

焼跡の灰の中から 強く高く飛び立った
落ちてゆく 夕日めがけ 西の空を見上げて

飢えを枕に 敗北を^{バネ}発条に
風向きを 道標に 駆け抜けて来た

過ぎ去った昔の事と
子供たちに 何ひとつ伝えずに
この国 何を 学んできたのだらう
飽和した都会 集う家は遠く
ブラウン管の前でしか 笑わぬ子供

老いてゆく
孤独の影に脅え 明日に目を伏せて

何を支えに
何を誇りに
走り続けて行こう
You just believe in money.

焼跡の灰の中から 強く高く飛び立った
1945年 打ちのめされ 砕けた心のまま

1945年 打ちのめされ 砕けた心のまま

(CBS/SONY アルバム "FATHER'S SON" より)

おわりに

戦後、急激な経済と技術発展を見せたこの日本の中で、私達は十九世紀のイギリス、それもダートムアールでバスカヴィル家の魔犬におののいたチャールズ卿や村人のようになっているのではないだろうか。現代の日本人である私達も、進みすぎた科学・技術についてゆききれない心を持っているのではないだろうか。

それを証明するように、新興宗教の隆盛ぶりや靈感商法による被害の莫大さが日々マスコミによって騒ぎたてられている。かくいう私も長年しまいこんでいた市松人形を陰干しを兼ねて箱から出すと髪の毛を貼り付けている部分が剥れ落ちてしまうと、その晩から頭痛がするような気がし、数日ほど寝込んでしまった。

こういった心の隙間に揺さぶりをかけるステープルトンから自分を守るため、心の片隅に、シャーロック・ホームズという論理的思考や科学的判断を下すことのできる正しい紳士を住まわせておくべきであると私は思う。

(注) Oscar Wilde (1854~1900)の著わした小説 *The Picture of Dorian Gray* (1891) は世紀末イギリス文学の一作品として広く知られている。

<主要参考文献>

『バスカヴィル家の犬』 延原 謙訳, 新潮文庫 (1988年7月15日発行)

※ 文中の訳文は、記入していないものは、全てこれから取材した。

"THE HOUND OF THE BASKERVILLES"

YOHAN PEARL LIBRALY 1990年2月刊

※ 文中の英文は、全て YOHAN LIBRALY からの抜粋である。

以下の作品は コナン・ドイル著, 新潮文庫 延原 謙訳 のものである。

『緋色の研究』	1991.3.15
『四つの署名』	1991.3.15
『シャーロック・ホームズの冒険』	1992.1.25
『シャーロック・ホームズの思い出』	1992.12.10
『シャーロック・ホームズの帰還』	1992.7.25
『恐怖の谷』	1991.6.30
『シャーロック・ホームズの事件簿』	1992.2.15
『シャーロック・ホームズの叡智』	1991.1.2
『シャーロック・ホームズ最後の挨拶』	1993.2.15

<参考文献 (1)>

- 『押田教授の事件の現場』 押田茂實著, コスモ出版, 1992.8.10
『妖精事典』 キャサリン・ブリッグス編著, 富山書房, 1992.9.28
『人間行動論入門 一心と行動をさぐる』 堀端孝治・高橋 超・磯崎三喜年編,
1992.4.8
『コナン・ドイル』 C・D・カー著大久保康雄訳, 早川書房, 1962.7.30
『シャーロック・ホームズの読書談義』 コナン・ドイル著, 佐藤佐智子訳, 大修館

<参考文献 (2)>

- 『コナン・ドイル』 河村幹夫著, 講談社現代新書, 1992.7.20
『シャーロック・ホームズの履歴書』 河村幹夫著, 講談社現代新書, 1993.1.19
『シャーロック・ホームズ鑑賞学入門』 大村申二著, 丸善ライブラリー, 1992.4.20
『ホームズの世界』 長野支部編集, 1993.11.10
『詳説シャーロック・ホームズ』 小林 司・東山あかね著, 東京図書, 1987.8.10
『シャーロック・ホームズの見たロンドン』 チャールズ・ヴァイニー編著,
田中喜芳解説・訳, J I C C出版局, 1990.4.25
『ホームズのヴィクトリア朝ロンドン案内』 小林 司・東山あかね著, 新潮社,
1993.3.25
『わが愛しのホームズ』 ロヘイズ・ピアシー著, 柿沼瑛子訳, 白水社, 1993.3.25

- 『わが愛しのワトスン』 マーガレット・D・ブリッジズ著、春野文伸訳、文藝春秋、
1992.9.30
- 『ホームズの秘密ファイル』 ジューン・トムスン著、押田由起訳 創元推理文庫、
1991.5.31
- 『奇巖城』 モーリス・ルブラン著、南洋一郎訳、ポプラ社文庫、1981.4
- 『ドリアン・グレイの肖像』 オスカー・ワイルド著、福田恒存訳、新潮文庫、
刊年不明
- 『怪談の化学』 中村希明著、講談社、1979.8.30
- 『犬のフォークロア —神話・伝説・昔話の犬—』 大木卓著、(株) 誠文堂新光社、
1986.3.31
- 『陰陽道の本』 大田雅男編、(株) 学研、1993.5.15
- 『陽のあたる場所』 田家秀樹著、角川文庫、1990.6
- 『オン・ザ・ロード・アゲイン』 (上) (下) 田家秀樹著、角川文庫、1992.4.10
- “RISING SUN” 浜田省吾 CBS/SONY “FATHER'S SON” より、1988.6.2
- “SON'S FATHER” 須藤晃著、アルバム “FATHER'S SON” より、1988.6.2

(評)

約1年をかけて研究をまとめて行くうえで、推稿の面に、論旨の展開の面に、また研究の進め方そのものにも、助言者としての不満は残る。しかし、命題に対して真撃にとりくもうとする研究者の態度には打たれるものがある。この研究に取組んだ中川さんは熟考する力をいよいよ磨いて行くにちがいない。また文学を楽しむゆとりもさらにゆたかに見出すことであろう。自らの文学創造にむかって足下を耕し、地平を拓き、目を高く天に挙げることができるようになるであろう。それはこの作品の作者自身がねがっていたことではなかろうか。今また世紀末の地表を覆う混沌と闇の力を砕く光のさし来るありさまを確かに凝視する勇気と、英知と、そして確信にともなう忍耐と寛容とを、相共にもちたいものである。

(寺田 芳徳)